

生活科の発足時における授業実践についての一考察

福應 謙一* 野田 敦敬**

*愛知教育大学大学院生

**生活科教育講座

A Consideration about Lesson Practices at the Time of the Inauguration of Life Environment Studies

Kenichi FUKUOU* and Atsunori NODA**

*Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

I 研究目的

昭和62年12月24日、教育課程審議会の答申によって、小学校低学年に生活科の新設が決定した。それを受けて、平成元年3月15日告示の新学習指導要領によって新しい教科「生活科」が設けられた。当時の教科調査官中野は「戦後教育にして、小学校において初めて教科の改廃がなされた」¹⁾として、生活科新設の背景と要因を述べている。

新教科発足は、多くの教師に不安と戸惑いを与える一方で、新しい教科を創り上げる意欲的な授業実践も多く見られた。とりわけ、全国の各都道府県につくられた「生活科研究推進校」51校の果たした役割は大きい。愛知県御津南部小学校もその一つで、平成元年度の生活科推進校連絡協議会において研究発表校2校中の1校に選ばれた。当校の研究内容は、研究発表会や三河教育研究会生活科委員会を通して、愛知県三河地域を中心とした近隣の学校に影響を与えた。

そうした中で、愛知県岡崎市においては、先進的に生活科の趣旨を生かした学習指導を取り入れるとともに、従来からある「教科指導員制度」の中へ「生活科指導員」を位置付けて、指導内容の充実を図った。移行期を経て全面実施の平成4年度から、岡崎市内各学校への生活科指導員の訪問が行われた。

本研究では、生活科発足当時の生活科指導員訪問時の学習指導案を基にして、新教科を取り組む教師の心意義や、形を真似ながら何とか新しい教科の本質に迫ろうとする様子（拠り所）を洗い直した。今日の生活科授業実践の状況から見れば、稚拙に感じられる部分も見られるが、新教科を実践する教師の使命感を持って授業を創造する姿勢には学ぶところは多い。発足当

時の教師集団が、単元を構想して授業創りに取り組む姿を問い直して、改めて今日に伝えたい事柄を探ることにした。

II 研究方法

1 対象

岡崎市教育研究所所蔵の生活科学習指導案を基にして、単元構想や学習指導の展開の内容を分析し、指導内容や指導傾向を把握する。合わせて、その学習指導案と生活科発足初期に出された出版図書・研究冊子等との関連について明らかにする。

- ・平成4年度 生活科学習指導案 12校28実践（4月末～11月）
- ・平成元年新学習指導要領告示前後の出版図書
- ・生活科研究推進校の研究物 等

2 分析の視点

学習指導案の授業実践の開催時期や季節の背景、地域環境などを考慮しながら、次の視点にしたがい分析した。

- ・単元目標が示されていない学習指導案が多い事実から、単元目標に当たる内容を単元構想の文中から見出して、目標の方向性をとらえる。
- ・単元構想に学習指導要領の目標や内容の一文を取り入れていることが顕著なことから、生活科への取り組みの実態や、単元構想に見られる主な指導内容を押さえる。また、単元の展開に当たっては、子どもの生活から発したのことが多いことを踏まえ、それをどのようにして学習活動として発展させているかを明らかにする。
- ・生活科の本格的な授業実践は初めてという教師が大半と思われる中で、生活科に取り組む意気込み

や姿勢、単元構想や指導計画における他教科・領域等との関連の取り扱い方をとらえる。

- ・「具体的な活動や体験を重視する」ことを受けて、何を基にして活動や体験をとりこんでいるか、各学習指導案を比較検討する中で見えるものを明らかにする。

Ⅲ 研究内容

平成元年告示の「新学習指導要領」の移行期間を経て、平成4年4月から全面実施に入った。それまでの助走期間はあったものの、正式の発足となると少し慎重にならざるを得ない。各学校においては、先行研究を頼りにしながら、学校独自の年間指導計画を作成した。それは、「生活科の活動」と表記されたり、単に「指導計画」としてまとめられたりした。それを基にして1・2年生担当者は、年間の生活科の進め方を学年、もしくは低学年部会等で協議した。ここに示すそれぞれの学習指導案は、各学校の授業研究の一環で作成されたものであるから、学年で検討したり、学校の研究主任もしくは教務主任等の指導を受けたりして、実践に漕ぎ着けたものと思われる。いずれの場合も、各学校において、考えを相互に出し合っただけで出来上がったものであることには間違いはない。

昨今の生活科指導への取り組みや実践上の課題を踏まえながら、発足当初の学習指導案に見られる取り組みの状況を探ることで、今後の指導に生きるものを見出したい。

平成4年時の学習指導案を分析することを通して浮かび上がった今日の課題5点について、解決の方向を明らかにする。

① 学習指導要領をきちんと理解しないで、授業が行われていないか。

当初は、単元を構想するにあたり、拠り所として学習指導要領に頼らざるを得ないという状況にあった。多少の授業実践例の出版図書は見られたが、生活科という学習指導の根本的な考え方を把握するためには、やはり学習指導要領に立ち返って基盤を固める必要があった。

○平成4年4月30日 1年「みんなであそぼうーたのしいがっこう」

新学期が始まって間もない頃の実践単元である。新1年生は、学校生活に慣れるのが精一杯という時期に「構想」の文中に次のような記述が見られた。

新学習指導要領での、生活科の教科目標は次のようである。「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」

これには見られない、今日の「自分と身近な人々(とのかかわり)」を別にすれば、正しく発足当初から今日に至る生活科の目標そのものである。これを大上段に据えて構想するあたりは、初期生活科ならではの記述である。大単元名「たのしいがっこう」は、小学校生活 指導資料『指導計画の作成と学習指導』²⁾の指導計画例にも「楽しい学校(16時間)」と位置付けられている。また、愛知県御津南部小学校の「平成元年度の年間指導計画」³⁾も同様である。それらを受けた指導内容とも考えられる。この前者の計画例では、「・友達をつくろう、・学校探検をしよう、・通学路の探検をしよう」という小単元名も添えられている。後者は、「・みんなともだち、・がっこうたんけん、・あさがおだいさくせん」と続く。

本学習指導案では、「友達をつくろう」に当たるところを、「みんなであそぼう」という、遊びを取り入れた単元名を設定した。従来の学習指導においては、遊びを学習と直結した指導内容は見られることは少なかった。中野は、「『遊び』も学習である」⁴⁾と題して、「『遊び』を学習活動として位置づけたことは、極めて重要な意味を持っている」と述べ、「我が国の学校教育が、伝統的に遊びを学習として認めなかったことは、これまで学校教育において、遊びについての研究がほとんどなされてこなかったことから明らかである。遊びは学校教育の課題ではなかったからである」⁵⁾と言い切る。ただ、遊びを学校教育の中で全く認めて来なかったわけではないともしている。「なぜ、いま遊びなのか、遊びの学習をどう展開するか、生活科が提示したこの問題は、これからの学校教育の重要な課題である。」⁶⁾と投げかけている。本学習指導案では、「遊びというとは一般的には、無駄なこと、学習には関係ないことと受け止められがちである。ただ低学年の子どもたちにとって、遊びとは生活そのものである。」と押さえる。6時間完了の単元の後半では、「ともだちをふやそう、ひろいところであそぼう、たくさんのもだちとあそぼう」という学習課題が見える。遊びを学習として確立するために、ここでは「あえて遊具を使った遊びを取り上げなかった」とし、「ルールを変えて新しい遊びを工夫していけるように助言したい」としている。遊びの内容、遊び方をも創造していこうとする趣が感じられる。

担任教師は、本時の目標を「①新しい友達と仲良く遊ぶことができるようにする、②遊びにはルールがあり、楽しく遊ぶにはルールを守らなくてはいけないことに気づくことができるようにする」としている。そして、「具体的な活動や体験」に重きが置かれることから、各種「探検」は重要な学習活動として位置づけられる。探検が学校内外の学習活動の主流となって広がっていった。

当初の生活科の単元構想において、根拠として学習指導要領はとりわけ大きな位置を占めていた。今日においては、ややもすると「子どもの活動ありき」中心の生活科が見られる中で、敢えて、生活科の目標を提示して、指導者の立つ位置を明確に示したものと思われる。足元となるものがぶれない学習指導は、教科の目標達成に重要である。

生活科は我が国における初等教育というものを大きく変える教科として発足した。従来からの指導方法である事前に教える教材ありという考え方だけではなく、目の前の子どもにとって何が必要か、育てようとする子ども像があってスケールの大きな構想が求められる。今日においても、子どもをとらえ、とらえ続ける教師が時間・空間、心理的に広がりや深まりを構想して、子どもたちの活動や体験の充実・発展に期待をかける。これまでに、子どもの活動を主体とした実践事例が多数出版され、手にとって参考にできる機会が増えたがゆえに、基本に立ち返って学習指導に臨みたいものである。

とりわけ、「小1プロブレム」⁷⁾の課題を受けて立つ生活科においては、今日的課題を重く受け止めて対処しなければならない。幼保小の連携強化、「生活科を核とした単元構成」、「合科的・関連的な指導の一層の充実」等、義務教育における学習活動の始まりに当たり、小学校における学びが円滑に進むように細心の注意を払いたい。

② 教師の扱いたい教材を使用し、子どもの興味・関心などの実態が置き去りにされていないか。

発足当初においては、教科書教材は教師にとって、大きな情報源であった。何を取り上げて、子どもたちにどんな追究をさせるか、懸命になって教科書に学習素材を求めた。しかし、どのような教材と出会わせたらよいのかと考えると、まずは目の前の子どもをとらえるしかなかった。というのは、それまでに具体的な実践事例が少なかったからである。手探りの中で、単元構想に思いを巡らせた。

学習指導において、子どもの実態をとらえることは、単元構想の始まりである。子どもをとらえに合わせ、教材を用意して学習が展開される。子どもをとらえることは、生活科の学習指導においては、尚更必要なことである。生活科の本質からいって、まず、「子どもの生活ありき」だからである。

とりわけ、生活科発足当初は、生活科の教科の特性を考慮して、意図的に、まず子どもの日常生活の様子をとらえることから始められた。

○平成4年5月21日 1年「がっこうたんけんをしよう」

担任教師は、「希望と不安を胸に入学してから2カ月になろうとしている。見るものすべてが未知のもので、

不安と緊張の表情で過ごしてきた子どもたちであった。新しい友達、大勢の仲間、勝手のわからぬ『学校』の中で、思うように行動できず、自分の教室から離れることは怖いことだという思いの子もいた。」というようにとらえた。一般的な子どもの様子ではあるが、不安が前面に立つ子どもの姿が目につかんでくる。こんな子どもたちを何とか活動させたいと思って教師は単元を構想する。子どもの中の、「お姉さんの組に行ってもいい？」との思いを聴き逃さなかった。「怖いから行きたくないのではなく、恐いけど行ってみたいという好奇心を持っている」ことを、教師は見事にとらえて、子どもたちの新たな出会いに対する不安感を、新たな挑戦に対する好奇心として、「活動の範囲を広げること」としている。

○平成4年5月21日 2年「とび出せ！のはらたんけんたい」

本教諭の場合は、生活科の教科目標を受けて、学校としての生活科を取り組む目標を「F学区の子らが、体を通して、学校や家庭、F学区の町や自然を愛し、それらに目を向けながら、自分や自分の生活について考える力を育てていく中で、生活に必要な習慣や技能を身に付け、人として、これから生きていく素地を養うこと」としている。

それを基盤として、子どもたち（教師も）生活科として学習するのは初めてという緊張感と戸惑いの中で、最初の単元「2年生になった」に引き続いて、本単元「とび出せ！のはらたんけんたい」を設定している。これまでの草花に対する子どもの実態をつぶさにとらえた教師は、「タンポポ・カラスノエンドウ・スイバ・シロツメクサ」などへの関心から「子どもたちの心は、野原の草花に寄せられている」として単元を設定したのである。

学習活動は全体であったり、グループであったりしているが、バッチやバッグなどの用意も周到で活動の意欲を高めている。そして、将来、大人になってからも「野原の草花に心寄せられる人であってほしい」と願って単元構想を閉じている。

生活科の学習指導の実践事例が充実してきた今日、何を教材として用意するか、教師の選択の幅が広がってきたと思われる。それぞれの学校においても年間指導計画が用意され、過去の実践事例が残されている。しかし、子どもが違えば、学習指導の展開も異なる。野田は平成20年の学習指導要領の改訂の解説書の「内容構成の視点」⁸⁾において「各内容は、生活科のねらいや目指す子ども像、また、子どもを取り巻く学習環境の実態、そして、学校に求められる社会的要請など、多様な要因によって設定されたもの」としている。

教材内容の選定は、子どもを最もよく知っている担

任教師によって行われることが望ましい。多くの実践が積み重ねられてきた今日ではあるが、ともすると、こんな実践をしてみたいという教師の思いが前面に出てしまい、子どもの思いや子どもの生活する環境が二の次になっていることがある。子どもたちに寄り添いながら、どのような力を培うことが将来にわたって生きる力となるか、原点に立ち返って単元を構想するようでありたい。

生活科の根幹をなすのは子どもの生活そのものである。子どもたちが日常生活をどのように過ごしているか、生活の中でどのような経験を積んでいるか、子どもの生活をとらえ続ける教師による生活科の授業作りを目指したいものである。日々の子どものたちの生活の様子、日常的に見られる子どもたちの関心事など、子どもをとらえる機会が多い。子どもの興味・関心の延長線上に教材が見えてくるものと考えられる。

③ 地域の実態に合わせて教材化しているか。例えば、地域の伝統文化としての祭りを生かして、教材化がなされていないのではないか。

平成4年当時のA社の教科書では、「みのりの秋」と題して、「秋を見つけよう」「とり入れをしよう」の見出しで、サツマイモやダイズの収穫の様子を紹介している。また、「秋のとり入れをしよう」の見出しで、地域の秋祭りの様子を想起させる内容を示した。それを受けて、子どもたちの学習成果の発表の様子と思われる、自作のお神輿を担ぐ子どもたち、ドングリゴマや木の葉のお面を並べる緑日の露店の様子を示した写真や挿絵が掲載されている。盛大な祭りの様子である。

10月、11月実践の2年生の各学習指導案はいずれも祭り関連ばかりであった。教科書に示された秋祭りのインパクトに大きく影響を受けて、秋の季節に合わせた収穫や成長の様子を、「祭り」として祝い、盛り上げるものである。作物の実りの秋としての「収穫祭」を強く印象付けるものとなった。

○10月8日 2年「町のお祭り わたしたちのお祭り」

育てた作物を収穫することを通して、自然の恵みを有り難く思い、それを地域で行われるお祭りに関連させて収穫祭を催す企画である。長い期間をかけた夏野菜の栽培経験は、サツマイモの収穫につないで秋の祭りとした構想である。

子どもと地域の祭りとの関連は深く、収穫祭として祭りをとらえるのは、容易であろう。「感謝の気持ち」や「地域の中で生きている自分に気づくであろう」というねらいは、重く受けとれる。

○10月29日 2年「うさぎ祭りをしよう」

構想において、次の四つの目標を挙げている。

- … お祭りの楽しさを味わうことができる
- … お祭りで使うものを工夫して作ることができる
- … 友だちと協調、協同する大切さに気づく

… お祭りに関心をもつことができる

秋祭りの時期に、成長するウサギが元気に育ってほしいという願いを「お祭りという形で表現できる」と考えた取り組みである。学級だけにとどまらず、学年全体のお祭りとし、1年生を招待している。

○11月5日 2年「おまつりをしよう」

地域における子どもたちの祭り体験を基盤にして、「お祭りにも人々の願いが込められている」ことに気付かせたいとしている。合わせて、「みんなで一つの物を作り上げていくことの難しさや面白さ、でき上がった時の喜び」を味わわせたいと結ぶ。

そして、楽しいお祭りを実現することにより、作り上げたことへの満足感を味わい、自分たちの手で作ったという自信をつけてほしいと願う。

同じ学校の同じ学年においても、子どもが違えば、単元構想の内容も異なる。

別の学級では「心躍る」祭りを取り上げ、それにマリーゴールドの成長の喜びを合わせて「お祭り」につなげている。合わせて、「あきのやさいをそだてよう」の単元で、大根・白菜・キャベツの成長の願いを込めたことも祭りに結び付けた構想をしている。

地域の秋祭りに合わせて実践することで、何とか豊作祈願の意味と五穀豊穡の感謝の気持ちをとらえさせたいと願った単元設定である。

○11月12日 2年「やさいまつりをしよう」

4月以来、一人一鉢で育てたミニトマトをはじめ、キュウリ・スイカ・トウモロコシ等の野菜を育ててきて、作物を育て食べることを楽しさを味わっている。その収穫の喜びを地域で行われている春秋の祭典と関連させて、自分たちの「やさいまつり」を展開する内容である。地元の神社の祭礼は広く子どもたちの経験するところで、これまで楽しんできたものである。実際の祭礼を想起して、「やさい子ども祭り」に関連させることで、祭りの意義や意味を知って計画する内容である。

本実践により、野菜を育てることで、育てた野菜への思い入れとなって野菜嫌いが少なくなることも期待できる。

○11月19日 2年「秋の子どもまつりをしよう」

本単元に入る前に、「秋を見つけよう」で秋の虫を飼ったり、収穫したサツマイモを掘って食べたりしている。音楽「虫の声」を合科で扱い、虫探しの場所で虫の鳴き声を工夫した演奏会を催している。また本実践では、テレビ放映『とびだせたんけんたい』を視聴して、サツマイモの収穫への関心を高めた。

秋の収穫の喜びを集約し、祭りの意義を考えて「おまつりをしよう」という意欲を高めた。昨年度、2年生から「おまつり」に招待されていることを想起させながら、自分たちのお祭りを企画する構想である。

ここに示した5実践は、どの単元構想においても秋

祭りの花盛りといった様相であるが、内容は生活する地域が異なることや着想の違いから様々な構想の展開が考えられている。内容の多くが野菜の収穫と関連させて祭りをつないでいる。草花の成長やウサギの成長を祝うものも見られる。また、各実践単元において、地域の秋祭り（時には春祭り等）を想起させて、豊作祈願・収穫感謝と祭りの関連を考えさせて祝いの意味を明らかにさせた展開となっている。子どもたちが祝う祭りが、地域の生活に根ざしているかどうかによって、指導展開の背景は異なるものとなっている。

この「お祭り」に関する単元は、多くの学校で取り上げられた。子どもたちの活動や体験を広げる設定で意義は十分に認められた。生活科研究推進校においても、単元「おまつりをしよう」（9時間）において、「町のまつり」・「わたしたちのおまつり」を小単元名に挙げて計画している。ただ、この祭りは次第に内容が、遊び主体の祭りを受け取れる展開となる傾向が見られ、「祭り騒ぎ」と危惧されるところとなった。

収穫の秋の学習を集約する形として、学習の集大成に「祭り」を位置付けることは有効である。季節の移り変わり、野菜栽培の作物の成長など、長期にわたる学習で学びを表現する喜びの姿として、祭りは子どもたちの学習意欲をかき立てる。継続的な観察、栽培活動などの学習成果を形として伝えられることで成就感・達成感も養われよう。

今日において、古くから伝わる良い「伝統文化の継承」を考える時、子どもたちの生活する地域に根ざす祭りの取り扱いについて、その価値や意義を今一度見直すことが必要と考えられる。多少時間を要することや、収穫との関連で長期にわたることから敬遠されがちになっているが、子どもたちを学校・家庭・地域で育てるといふ考えからいえば、必須の内容と思われる。自然や社会とのかかわり、それに多くの人々とのかかわりを期待できる学習として重要視したい。

④ 命を感じる動物飼育が敬遠されていないか。

小学校に入学する子どもたちにとって、学校での生き物との触れ合いはとても楽しみにするところである。家庭においては地域事情・住宅環境等で生き物を飼うことが難しいだけに、学校において実現したい事柄である。

このところ「いのちの教育」の必要性を声高に言われるようになってきているにもかかわらず、それとは裏腹に動物飼育に関する学習が敬遠されがちな傾向にある。休日を含めた毎日の餌や水やり、掃除等の日常的な世話の煩雑さを始め、様々な理由が考えられる。大切な学習対象、学習素材であるだけに適切に対応したいところである。

学習指導案から動物飼育に関するものを拾い上げてみると、1年生の学習指導で3点が挙げられる。いずれ

もウサギの飼育に関する内容である。

○平成4年5月7日 1年「ウサギさんとなかよし」

——「いきものともだち」——

単元構想において、「子供たちは、生き物が好きである。」や「下校の様子を見て」とのように、子どもたちの様子をまず述べる。次に「教室のすぐ前に小鳥小屋があって」として、取り巻く環境を述べ、「これらの活動を通して小動物や草花も自分たちと同じように生命を持っていることに気付かせ」のように、「心」や「態度」でまとめて、ウサギの飼育につないでいる。

ウサギの教材性として、「行動の様子に興味を持つ、絵・言葉・身体等で表現できる、大切に育てようという気持ちを培う」ととらえ、興味・表現・気持ちの面からまとめている。

ウサギを飼い、飼育の様子を「言葉や絵によってわかったことを表現」ということで、ウサギ飼育による学習活動の幅を押さえた取り組みである。

○平成4年6月4日 1年「どうぶつとなかよくなるよう」

——大単元「いきものともだち」——

単元構想において、「毎日の世話活動を通して、赤ちゃん誕生、けが、死等に直面し、命などに気づく」と記述して、ねらいを明示している。

大単元の内容を「くさ、どうぶつ、はな、むし、はな、はな、いちご」の7つの小単元に分けている。その中で、ここでは「どうぶつ」単元でウサギを取り上げている。

大単元「いきもの」で、動物を取り上げるものと考えて設定されており、「生活に密着した身近な動物であるうさぎとの具体的な体験や活動」を中心にしている。ただ、実際には「小動物を飼っている家庭は少ない」実態であり、動物飼育を通して「生命を実感させる」ことをねらっている。子どもたちの生活実態の中で足りない部分を学校の学習活動で反映させる構想ととらえることができる。

○平成4年7月2日 1年「どうぶつとなかよくなるよう」

学習指導要領生活科の内容を踏まえて「生命の大切さに気づき、・・・大切に育てよう」を第一の目標に掲げている。二つ目は、動物との触れ合いを「経験」すること、そして、三つ目は、動物とのかかわり合いを紹介する絵本作りとしている。

5時間完了の小単元であるが、入学以来のウサギ体験が基盤になっている。子どもたちの関心を継続しながら、視野を広げるために、国語科『うさぎ』の説明文からの発展として押さえたり、読書強調月間でウサギに関する絵本の読み聞かせを行ったりしている。さらに疑問点については、図書館での調べ学習や上学年の子に尋ねるように配慮している。ウサギについての図書館資料を多数用意して、子どもたちが関心に応じて調べたり、読んだり、見たりできるような設定である。図書館の活用が学校としてのサブテーマになって

おり、その関連を重視した計画ととらえられる。

生き物の飼育は、子どもたちの身近に存在するウサギを取り上げることが多く見られた。それまでは上学年の世話に任されていたウサギをかわいい存在として1年生が関わることとなった。当初はウサギを多く取り入れられたものの、その性質や生態から見て、飼育がなかなか難しいということから、次第に遠い存在になっていった。飼育の条件整備を重ねて定着している場合もあるが、他の動物飼育を取り入れられることもある。全体的には、飼育の大変さから、餌やりや清掃などの世話が簡単な生き物に代えられる傾向にあるが、「いのちを育む」ということから、今一度見直しを図りたいところである。

ウシやブタといった大型動物を始め、モルモット・ハムスターといった小型動物、チャボやアイガモ等の鳥類等、飼育される動物は多種多様である。子どもたちが置かれた生活環境や飼育条件などによって対象となる生き物はおのずと限られるが、飼育担当者みみの責任から枠を少し広げて、学校全体としてより多くの者の協体制作りが必要である。

生き物が育つ環境が難しくなっている今日ではあるが、人が人として生きる時、生き物との共存を学ぶことによって、自他共に大切にしようとする子どもが育つものと考えられる。生き物を避ける事情を考えるよりも、生き物と共にある価値と意義から実現の方向を目指したい。生活科において、生き物を飼育することを通して子どもたちが学ぶことは多い。体温の温もりを感じる生き物を世話することは、自分自身を見つめることである。生き物の世話を続けることで愛着が湧いて分身のように思えてくる。世話を欠かすことができないだけに困難を伴うが、自己責任において根気よく続けると、時に生き物の生や死と出会うことになる。生き物と自分とのかかわりにおいて、掛け替えのない対象としてみるのできるのである。

筆者は、ヤギの出産の様子を、2年生の児童・保護者、担任教師ともども立ち合った経験を持つが、その出産時の感動シーンを忘れることはできない。2月の休日の夕刻時にほとんどの子どもが保護者とともに登校してきており、母親ヤギに励ましの言葉を送る中で、1頭が生まれ、さらに1頭が生まれて、2頭の子ヤギが無事誕生した。子どもたちの心の中の大きな宝になったと思われる。

⑤ 学校探検、町探検における表現方法としての地図の扱いが弱くなっていないか。

地図作りは、子どもたちが空間的な広がりを表現する上で大切な学習である。子どもの立つ位置から、それぞれが直線的、平面的に事物・事象を押さえることができる。

低学年の社会科・理科が廃止されて生活科が新たに誕生したという経緯と、それまでの社会科の学習展開の流れから、当初、地図作りが学習によく取り入れられた。教科書においても、「まちたんけんの えちずをつくろう」(2年)や「あきのちずをつくろう」(1年)という見出しで床地図が作成された。観察や探検のまとめとしても地図が多用されていた。

○平成4年5月7日 2年「町のたんけん おもしろマップをつくろう」

単元構想において、「M学区という町は、実にバラエティーに富んでいる場所である」というように、学習対象としての地元の町の様子を述べ、続いて子どもの実態に触れて、子どもと学区の様子について押さえている。子どもの生活の広がりや行動範囲の広がりとなり、「学区に対する興味関心を引き出したい、学区の多種多様な面に気づくようになってほしい」と願っている。おもしろマップ、生活科マップ作りなどの活動を主体とした展開である。地図作りが活動と直結した意欲的な取り組みである。

○平成4年10月29日 1年「ほくのみち・わたしのみち」

単元の基本目標として「建物や施設・人・自然に気づくこと、友だちに紹介すること、安全に注意して歩くこと」の三つを挙げている。登下校時の子どもの様子、変わってきた学区の状況を踏まえ、子どもたちがとらえた事実を出し合う場を設定する構想である。子どもが、自分の見つけたものを絵や床地図を使って出し合うことで、お互いの見つけたものを認め合う。合わせて一人ひとりの子どものものの見方が深まり、生活・行動範囲を広げるように願っている。また、交通安全に気をつけて通学したり、道を歩く際の安全への意識を高めたりしている。

床地図を前にして、子どもたちの話し合い学習が展開される。自分の見つけたものを、地図の上で紹介する情報交換の場として設け、「お互いの見つけたものを認め合うと同時に、自分のものの見方や生活・行動範囲を広げさせる糧とする」ものである。教師の用意した床地図の上で、子どもの地図への関心が高まると思われる。

○平成4年11月12日 1年「にょろにょろたんけん・しゅっぱつ」

2学期の後半において、学校に慣れてきた子どもたちの行動・活動範囲をより一層持続していく実践である。学区の探検活動(にょろにょろたんけん)において、道沿いにある施設、友だちの家々など関心を広げ、探検活動の意義を説いている。しかも、1年生の範囲、2年生の範囲を意識した視野の広大を図って構想している。

1年生の四つの目標

- ①楽しく探検できる。
- ②喜びを味わうことができる。

③季節の変化に気づくことができる。

④気付いたことを自分なりに表現することができる。

こうしたことが、2年生の町探検で新しいことに気づき、地域の人々と深い関わり持つことになる基礎作りと押さえる。

探検を通して、によるによる地図が次第に長くなって「ちずをくわしくしたい」という願いとなり、「探検が楽しくて楽しくてたまらない」子が育つものと考えている。

筆者は、平成2年実践「チャボのたんぼぼ山をつくらう」において、校内でタンポポの自生する位置を示す地図作りを学習活動に取り入れた。方位や方角はあいまいなもの、タンポポと建物・施設との位置関係を子ども同士共有する手段として有効であった。チャボの餌となるタンポポを求めて、校庭の隅々まで活動を広げていった。

低学年の子どもにとって、生活空間を面的にとらえることは難しい。しかも、交通事情等によって現場で学ぶことが困難となれば、学習活動としての地図作りはできにくくなる。生活科発足当初に多く見られた絵地図作り・生活科マップ・床地図といったものの単元の中への位置付けが弱く感じられる。確かに方位や距離を正確にとらえることは難しいが、地図感覚を育てることは重要である。「によるによる地図」のように、点と点を線で結ぶ地図から始まって、次第に面的に広がりを持つ地図となるように心がけて、絵や図で分かりやすく表現する手法を残したい。地図は、事物・事象を客観的に見て、気付きを高めることに役立つからである。

IV 研究のまとめ

平成4年度実践の学習指導案28部を分析することを通して今日の課題をとらえ直すことを試みた。5点の課題を掲げて、学習指導案に記載された単元目標・単元構想・指導計画、それに本時の展開を読み直した。生活科に関する情報や事例が少ない中で、何とか学習として成立させるために、子どもの生活ぶりや実態をつぶさにとらえようとする営みを感じられた。生活科の学習に「まず子どもありき」という意識を強く持った。その反面、子どもの活動を押し出すことを前提とすることにより、活動ばかりが続く展開となり、立ち止まって考えなおす場面が少ないように思われた。「活動ありき」の学習指導が主流であった。

新しい教科、生活科を取り組むにあたり最も期待されたのは教師の授業構想力である。学習指導要領を基に、わずかに見られる実践事例を基盤にして、教師は単元を構想する。後は、子どもをとらえ、子どもをどのように育てたいか構想する教師の力量に委ねられ

る。

幸い、当地域には、昭和36年発足の三河教育研究会が存在した。生活科を立ち上げるにあたり、三河教育研究会の各教科・領域部会の中に生活科委員会が組織された。愛知県東部に位置する三河地方19郡市の学校代表が、生活科の授業はいかにあるべきか、相互の情報交換で研鑽を深めて、それを各郡市に持ち帰って、少しずつではあるが「生活科」像を創り上げていった。

三河教育研究会生活科委員会の研究冊子『昭和63年度生活科研究 No.1』に、巻頭の「はじめに」⁹⁾において大林信義委員長は次の言葉を載せた。

「さて、間もなく生活科が誕生します。小学校1・2年生で具体的な活動や体験を通して自立への基礎を養うことをねらいとしています。全ての教師が今『人の生きることの豊かさ』をどこに求めていくかを見極めながら研究を進めなければこの生活科は成り立ちません。子ども達が自分なりに努力して幸せをつかみ世の中を明るくする人になるために、どの子もせい一杯の学習ができるように助力したいものです」と記している。

これから22年余が経過した今日、発足当初の志は、どのように進展してきているか、経過を明らかにし直したいという思いで、残されている資料を洗い直してみることにした。幸いにも、今回の平成4年度の学習指導案が岡崎市教育研究所にまとまって残されていた。それ以降も、数量の多少はあるが、各年度の学習指導案が残されている。生活科発足から今日に至る間に、岡崎市内の小学校を会場にして、日本生活科教育学会（平成9年）や全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会（平成15年）の各大会が開催されている。この機会も、当地域の生活科の内容充実に大きな役割を果たしていると思われる。今後は、多くの学習指導案を単元名・単元目標・単元構想・指導計画・指導内容などの分析を通し、どのように変容して今日に至っているか順次明らかにしていきたい。

【参考・引用文献】

- 1) 中野重人編『生活科実践の基礎・基本』明治図書 1990年 p.20
- 2) 文部省『指導計画の作成と学習指導』平成2年 p.14
- 3) 愛知県御津町立御津南部小学校著『楽しい生活科の授業』黎明書房 1990年 p.216
- 4) 前掲書1) p.54
- 5) 前掲書1) p.54-56
- 6) 前掲書1) p.57
- 7) 文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』日本文教出版 平成20年 p.4
- 8) 野田敦敬編著『小学校学習指導要領の解説と展開 生活』教育出版 2008年 p.24
- 9) 三河教育研究会生活科委員会編『昭和63年度生活科研究 No.1』巻頭言

《分析対象とした学習指導案一覧》

岡崎市教育研究所所蔵

教諭

○2年生活科「やさいをそだてよう」21時間 L小 O教諭

平成4年度分

(2010年9月15日受理)

◇ 1 平成4年4月30日

○1年生活科「みんなであそぼうーたのしいがっこう」6時間
ー17時間 A小 M教諭

○2年生活科「ほくらのまちをたんけんしよう」12時間 A小
N教諭

○2年生活科「ほくらのまちをたんけんしよう」12時間 A
小 O教諭

◇ 2 平成4年5月7日

○2年生活科「町のたんけん おもしろマップをつくろう」9
時間 B小 P教諭

○1年生活科「ウサギさんとなかよし」7時間——いきもの
とともだち(19時間)——B小 Q教諭

◇ 3 平成4年5月21日

○1年生活科「がっこう たんけんをしよう」11時間 C小
R教諭

○2年生活科「とび出せ!のはらたんけんたい」12時間 C小
S教諭

◇ 4 平成4年6月4日

○1年生活科「どうぶつとなかよくなろう」(4時間)ー大単
元「いきものともだち」(20時間) D小 T教諭

○2年生活科「ほくたちのすんでいる町をたんけんしよう」14
時間 D小 U教諭

◇ 5 平成4年6月18日

○1年生活科「こうえんへいこう」11時間 E小 V教諭

○2年生活科「つゆのくらし」7時間 E小 W教諭

◇ 6 平成4年7月2日

○1年生活科「どうぶつとなかよくなろう」5時間 F小 X
教諭

○2年生活科「子ども水ぞくかんをつくろう」8時間 F小
Y教諭

◇ 7 平成4年9月17日

○1年生活科「自分の音をつくろう」10時間 G小 Z教諭

○1年生活科「水でっぼうであそぼう」9時間 G小 A教諭

○2年生活科「土手で遊ぼうー虫や草花と仲良くなろう」6時
間 G小 B教諭

◇ 8 平成4年10月8日

○1年生活科「みんなのこうえん」13時間 H小 C教諭

○2年生活科「町のお祭り わたしたちのお祭り」15時間 H
小 D教諭

◇ 9 平成4年10月29日

○1年生活科「ほくのみち・わたしのみち」12時間 I小 E
教諭

○2年生活科「うさぎ祭りをしよう」17時間 I小 F教諭

◇ 10 平成4年11月5日

○2年生活科「おまつりをしよう」11時間 J小 G教諭

○1年生活科「わたしのいえ」10時間 J小 H教諭

○2年生活科「おまつりをしよう」11時間 J小 I教諭

◇ 11 平成4年11月12日

○1年生活科「にょろにょろたんけん・しゅっぱつ」15時間
K小 J教諭

○2年生活科「やさいまつりをしよう」17時間 K小 L教諭

◇ 12 平成4年11月19日

○1年生活科「あきとあそぼう」15時間 L小 M教諭

○2年生活科「秋の子どもまつりをしよう」13時間 L小 N